

巨乳ファンタジー3if
-アルテミスの矢・メデューサの願い-
WEBアンケート特典短編小説

鏡裕之

闇が、冥界宮殿の寢室を訪れていた。

冥界は暗い。天界に比べれば、雰囲気も、そして純粹に明るさも、暗い。特に夜は天界の夜以上に昏冥に塗り込められる。

ペルセポネーは、夜中に目を覚ましたところだった。すぐ隣には大きな背中を向けて、自分が世界で最も好きな伴侶、自分がただ一人胸を押しつける相手、照れた顔を見るのが大好きな相手が眠っている。

冥王ハデス——ユピテルの兄である。

夜中に漆黒の中で目が覚めた時、ハデスの背中があると安心する。この暗闇に大好きな夫がいる。起きていなくても、その存在だけで安心する。

結婚した当初はそうではなかった。夫とは言葉も交わしたくなかったし、姿も見なくなかった。自分は強奪されてきたのだ。何が悲しくて、誘拐魔と言葉を交わさねばならぬのか。

初夜、処女を奪われそうになって、ずいぶん抵抗したのを覚えている。手につかん

だものなんでも投げつけていたら、夫は諦めて部屋を出ていった。

翌日、ハデスはまた部屋に姿を見せた。ペルセポネーは即座に枕を投げつけた。夫は何もせずに帰っていった。

翌日からはそのくり返しだった。夫は部屋の入り口に現れては消え、現れては消えをくり返した。そうやって、天界に戻る日が来るまで四カ月間凌いだ。

結婚の時の取り決めで、天界には八カ月いられる。天界はまさに天国だった。あの忌ま忌ましい、むさ苦しい男がいなくても、天国だった。だが、冥界に戻る日が近づいてくると、自分の足から脚、さらに腰、胴体へと絶望が浸食していった。まるで下半身から絶望の石に変わっていくみたいに――。

冥界に戻る当日は、いやでいやで仕方がなかった。戻りたくなくて、天界の果てまで逃げてみたけれど、捕まってしまった。

天界の扉から光の道を通って冥界の扉を開けると、宮殿には花が敷きつめられていた。かつてはただの黒い土の場所だったところが、お花畑になっていた。夫が部下に命じて花を植えさせたのだと知ったのは、後のことだ。

でも、やはり冥界は暗かった。花の明るさも、天界のそれに比べればやはり暗かつ

た。自分の心の暗さはそれ以上だった。夫は、自分との同衾を待ち構えているに違いない。また、夫を撃退する毎日が四カ月も続くのだ。

夜が来た。ペルセポネーは枕を抱えて夫を待ち構えていた。夜遅くになって、やはりハデスはやってきた。ペルセポネーは枕を投げつけた。顔面に枕の一撃を受けて、ハデスはおとなしく引き上げていった。閉まった扉のそばには、ハデスが持ってきた一輪の白い花が落ちていた。

翌日も、ペルセポネーは枕を抱えて待っていた。今日も枕で撃退するつもりだった。だが、やってきたのはハデスではなく、ハデスの家臣だった。家臣が伝えたのは、「今夜はハデス様はお越しになりません」の一言だった。

罠かもしれない。

安心して自分が眠りに落ちたところを襲うつもりかもしれない。

夜明けまでペルセポネーは起きていて、睡魔に倒された。目が覚めると、もう朝だった。そして、誰も自分の上にはのしかかかっていなかった。部下の言葉は本当だったのだ。

次の日も、その次の日も同じだった。

夫は自分に興味を失った？

同衾の夢を捨て去った？

そんなわけがない。あの男は自分を強奪したのだ。天上の世界から地下の世界へ。ただわがものとせんがために——。

事件はその三日後に起きた。

2

ペルセポネーが眠りかけた時だった。突然、荒々しい音とともに部屋の扉が開いて、夫が姿を見せたのである。

寝ぼけ眼を向けた途端、目が覚めると同時に怒りが湧き起こった。今夜も「ハデス様はお越しになりません」と部下が言っていたのに、嘘をつくなんて！ やっぱりわたしを騙したのね！

咄嗟に枕をつかむと、

「おまえは決してここを出るな！ この部屋から一步も出るな！」

とハデスは命じた。自分を強奪して以来の、強圧的な態度だった。わたしに命令するの？

どこへ行こうと、わたしの勝手よ。

言い返そうとすると、ハデスは背を向けて部屋から出てしまった。代わりに、ハデスが来ないと知らせた部下が顔を見せた。

「わたしは嘘つきと結婚した覚えはありません」

ペルセポネーがきつと鋭い視線を向けると、

「ハデス様のお言葉にお従いくださいませ。ヒュドラがタルタロスから逃げ出したのでございます」

ヒュドラは知っていた。巨大な胴体に九匹の大蛇が繋がっていて、首を切っても傷口からすぐ二つの新しい首が生えてしまう。そのため、永遠に倒すことができない。倒すためには、真ん中にある不死身の首を何とかしなければならぬ。

だが、ヘラクレスが退治して、星になったはずだった。今はどこにも――。

「わたしに嘘をつくのですね」

「タルタロスにヒュドラの卵が眠っていたのでございます。その卵が孵って、ヒュド

ラがタルタロスを抜け出したのでございます」

と部下は告げた。

ヒュドラは蛇の化け物だ。蛇ならば、卵があってもおかしくはない。それが、タルタロスに——？

「本当なの？」

恐る恐る尋ねると、部下はうなずいた。

「倒せるの？」

不安になりながらなおも聞くと、

「ハデス様は隠れ兜をお持ちです。それをかぶれば、ヒュドラなど恐るるに足りませぬ。ただ、退治の知らせがあるまで、どうか部屋でお休みを。この部屋にはヒュドラも入ってこられませぬ」

と部下は告げた。

家臣が去ってからも、ペルセポネーの心臓は鳴っていた。天界でこのようなことに遭遇したことはない。天界に化け物なんかはやってこない。

ここは冥界。タルタロスとつながる地下の世界——。

ヒュドラが実際にどんな姿をしているのかはわからない。ただ、胆汁が猛毒だということは知っている。卵から孵ったといえ、ヒュドラが凶暴なことに間違いあるまい。一日が経ち、二日が経った。ペルセポネーはずっと部屋にこもりっぱなしだった。夫の姿は見えない。部下にヒュドラのことを聞くと、まだ夫は捜索中だという。ずいぶんと時間が掛かるのねと言うと、冥界は全体がとてつもなく巨大な洞窟ですからと返事をされた。無数の通路がつながっていて、どこにいるのかわからないそうだ。

さらに三日が経ち、四日が経った。その間も、ずっとペルセポネーは部屋から一歩も出ずにいた。吉報は相変わらず届かない。ペルセポネーは我慢できなくなってきた。自分はずっと開けたところに住んでいたのだ。部屋に四日間もこもりっぱなしなんて、とてもじゃないがもう無理だ。

(朝だったらきつと平気よね)

五日目の朝、ペルセポネーは部屋を出た。

「なりません、ペルセポネー様！」

家臣が気づいて止めにかかる。

「邪魔をしないで。すぐに戻ります」

そう言った時だった。突然、大地がふるえ、凄まじい咆哮とともに九つの首の化け物が姿を現したのだ。

「ペルセポネー様、中へ！」

部下が言い捨てると同時に飛び掛かっていた。ヒュドラの四つの首が叫び、五つの首が何やらどす黒いものを吐いた。触れた途端、黒い煙を出して悶絶しながら部下がとけた。

ペルセポネーは悲鳴を上げた。

元のヒュドラにものを溶かす力はなかったように思う。だが、卵から孵ったヒュドラは、親とは別の力を有していた。

九つの蛇の頭が、自分の方を向いた。

(来る……！)

部屋の扉までは二十歩以上距離があった。

走って逃げる？

きつと、無理。

それ以前に、動けなかった。ヒュドラの十八個の目に射すくめられた途端、凍りつ

いたようになってしまった。

勝てない。

逃げられない。

戦闘力のない者が知る、言語なき絶望だった。

(来る……！)

ペルセポネーは死を直感した。蛇の頭が口を開き——ペルセポネーは不意に横殴りに飛ばされていた。

いや。

飛ばされたのではない。姿の見えぬ者に捕まって、その後大地に投げ出された。自分がいた場所をヒュドラの毒が襲い、自分のすぐそばで男が呻いた。

ペルセポネーは男に抱かれて、地面に転がっていた。抱いていたのは、隠れ兜をかぶった男——ハデスだった。肩に毒が掛かって、煙を上げていた。

ペルセポネーは息を呑んだ。

(わたしを助けてくれたの……?)

嘘と思う。

この人はわたしの夫。

でも、わたしは夫と認めたことはない。身体を重ねたことも、唇を合わせたこともない。自分は四カ月もの間、枕を投げつづけて夫を拒絶しつづけたのだ。
なのに。

自分が無視し、拒みつづけた相手が、自分を——？

ペルセポネーはハデスの肩を見た。

(ヒュドラの毒……?)

(わたしを守ろうとしたから、掛かってしまったの……?)

動転していた。

自分に情をかけるはずのない人が、自分に情をかけたという事実を、簡単に受け入れることができなかった。

「おまえは部屋から出るな。部下が来るまで扉を開けるな」

言うど、ハデスはペルセポネーを抱えて部屋の扉へ走った。ペルセポネーを放り込んで扉を閉める。

思わず、閉まった扉に駆け寄った。咆哮が鳴り響いた。

あの人が戦っている？

ヒュドラの毒は？

少しかかっていたみたいだけど。

わたしのせいだ。

わたしが朝なら大丈夫と外に出てしまったから……。

あの人は大丈夫なの？

(死なないで……!!)

初めて、ハデスに対してそんなふう思った。

死なないで。

やがて咆哮が聞こえなくなった。

ヒュドラは退治されたのだろうか？ 扉を開けたい。でも、扉を開けるなどハデス

には命じられている。

しばらくして、ノックが鳴った。

「ペルセポネー様。ヒュドラは退治されました」

「あの人は？ 大丈夫なの？」

少し間があった。

「ハデス様は——」

3

自分をヒュドラの毒から救ってくれた男は、怪我をして意識を失っていた。肩口からは相変わらず煙が立っている。

自分のせいだ。

自分がずっと部屋にいなかったから。外に出てしまったから……。自分が部屋にいれば、この人が怪我をすることはなかった。でも、自分が外に出てしまったから……。

「怪我は……?」

「少し……」

と部下は答えた。

「でも、きっとハデス様なら復活されます」

「死んじゃうの?」

部下は答えなかった。

思わず、ペルセポネーはハデスの許に跪いた。ハデスの顔には泥が掛かっていた。宮殿の庭の黒い土だ。その土にまみれて、花びらがほつぺたにこびりついていた。

目は固く閉ざされている。唇も閉じている。

ペルセポネーは、ハデスの頬に指を触れた。

身体は冷たかった。瞼はやはり開かなかった。

身体の冷たさと瞼の無反応に触れた途端、

(ごめんなさい……)

心の底から申し訳ない気持ちが入み上げてきた。

自分のせい。

この人がこうなったのは、すべて自分のせい。

自分は決してこの人に対して優しくなかった。冷たかった。唇にも肌にも、指一本触れさせなかった。四カ月もの間、毎晩毎晩、枕を投げつづけた。八カ月ぶりに天界から冥界に戻ってきた時も、枕で撃退した。

なのに。

この人は、ヒュドラから自分を救い出してくれた。冷たい枕の仕打ちばかりしてきた自分のために、毒を浴びてしまった。

(ごめんなさい……)

申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになった。目元が熱くなった。

ペルセポネーは、初めて自分からハデスの手を握った。ハデスの手は冷たかった。

(わたしのせいで、ごめんなさい……)

ハデスの手に、両手を重ねた。

指がわずかに動いた。

(死なないで)

ペルセポネーは願った。

(生きて……)

夫の身体は、夫の寝室に運び込まれた。大きな身体だった。寝台も、自分の寝台より一回り大きかった。

ペルセポネーは、部下が用意してくれた布をお湯につけて、夫の顔を拭いた。でも、

夫の表情は変わらなかった。冥界一番の清水も汲んできてもらって、スプーンで口許に運んだ。唇に少しづつ水を垂らしてみた。だが、夫は目を覚まさなかった。

家臣たちは寝室にお下がりください、何かあったらすぐご連絡しますからと言ってくれたけど、離れる気分になれなかった。離れたら、自分がどうしようもなく情のない者、恩知らずに思えた。

夜も、蠟燭を灯しながらペルセポネーはハデスを見守っていた。

気がつくと、朝になっていた。もしかしたら……と期待したが、夫は目を覚ましていなかった。

また布をお湯で濡らして、夫の顔を拭いた。それから、スプーンで唇に水を垂らした。肩からは相変わらず蒸気が上がっていた。

(このまま目を覚まさずに死んでしまうのかしら……)

とペルセポネーは不安になった。

昼頃、部下から、カムペーも見舞ってやってほしいとペルセポネーは頼まれた。カムペーは冥界宮殿の番人だ。ヒュドラを阻止しようとして、吹っ飛ばされたらしい。

カムペーは宮殿の小さな部屋で寝転がっていた。体中に包帯を巻いている。ペルセ

ポネーを見ると、「無念」と一言言った。それから、

「ハデス様は？」

と尋ねた。

カムペーは自分が来る何百年も前から、宮殿を守ってきた者だ。ハデスのことが何よりも気にかかるのだろう。

「疲れて今は眠っています。そのうち、目を覚まされるでしょう」

とペルセポネーは嘘をついた。本当のことを言っ、カムペーを心配させたくなかった。

ハデスの寝室に戻ると、ハデスは相変わらず眠っていた。

肩からは蒸気が発していた。天界から到着したばかりのニンフたちが、肩に聖水を振りかけていた。

その夜も、ペルセポネーはハデスの寝台のそばで過ごした。蝋燭の灯の中で夫のそばにいと、悲しみが襲いかかってくる。

この人は、自分に愛されないまま死んでしまうのだろうか。こんなことになるのなら、受け入れてあげればよかった。冷たくしたわたしを命懸けで守ってくれたのに、こ

の人はわたしの優しきを見ることなく亡くなってしまふのだ。

変化が起きたのは三日目だった。肩から水蒸気が上がらなくなったのだ。

(治る……！)

ペルセポネーは狂喜した。

(きっとこの人は蘇る……！)

四日目には傷口が塞がった。

そして五日目の昼に、ようやくハデスは目を開いた。シーツに顔を突っ伏してペルセポネーは眠っていた。ふと、うたた寝をしていたことに気づくと、ちょうど夫が目を開くところだった。

夫の目が天井を向いた。しばらく視線が天井を彷徨う。それから、視線が下がって、部屋の壁へと向かった。その時に、うたた寝から目を覚ましたばかりのペルセポネーに気がついたのだ。

目を覚ました。

やっと起きてくれた。

胸いっぱいになって、なんとさえばいいのかわからなかった。夫も、驚いた様子だっ

た。自分がそばにいるなんて、少しも考えていなかった様子だった。

「お水は……?」

夫は無言でうなずいた。

スプーンで掬って口許に運んでいった。夫は一呑みして、

「地底湖の水か」

と言った。

「肩は……?」

「もう痛まぬ」

と夫は答えた。答えながらも、夫はじっとペルセポネーを見ていた。夫の視線に申し訳なくなつて、ペルセポネーは視線を外した。

「ごめんなさい……」

初めて、夫に対して謝った。

「わしを看病してくれたのか……?」

「た、たまたまです……」

とペルセポネーは嘘をついた。

たまたまではなかった。五日間、ずっと枕元にいたのだ。

「身体に怪我はないか？」

とハデスは尋ねた。ペルセポネーは、うつむいたままうなずいた。

「無事ならよい」

夫の手が伸びてきた。唇を閉じたまま、ペルセポネーの髪に触れる。

ペルセポネーは逃げなかった。いやがりもしなかった。

「おまえが無事でよかった……」

もう一度、夫は言った。

途端に、安堵と申し訳ない気持ちとで胸がいっぱいになって、鼻の頭がツンとなった。

夫の手が、初めて自分の頬に触れた。頬に触れた夫の手に、ペルセポネーは自分の手を重ねた。

ああ。

温かい。

そう思ったら、目から涙が溢れだした。

夫が目を覚ましてよかったという思い。夫に申し訳ないことをしたという思い。さんざん冷たいことをしたのに、無事でよかったと慰勞されたことへの思い。感情が錯綜して、抑えきれなかった。

「泣かずともよい。おまえが無事でよかった」

夫はくり返した。

「ごめんなさい……」

泣きながらペルセポネーは言った。

「おまえが無事であればよい」

と夫はくり返した。

翌日の夜、ハデスはペルセポネーの寢室を訪れた。夫が自分の部屋を訪れるのは、もう何回目だろう。百回は超えている。

いつも、夫には枕を投げつつけてきた。でも、今回は、ペルセポネーは枕を投げつけなかった。

もう、夫を拒む気持ちはなかった。自分が枕を投げつつけても、夫は一言も罵詈雑言

をぶつけなかったし、暴力も振るわなかった。そればかりか、危機に駆けつけて、ヒュドラの毒から自分を守ってくれたのだ。おかげでハデスは毒を浴びて、何日も寝込むことになった。それでも、夫は自分を責めることはしなかった。ただ、無事かを尋ねただけだった。そして、そのことに安堵しただけだった。

夫が自分の前に立った。

大きな身体だった。この身体が、自分をヒュドラの毒から遮ってくれた。おかげで自分は一滴も毒を浴びなかった。

夫が自分に手を伸ばした。ぎゅっと抱き締める。

ペルセポネーは拒まなかった。ただ、抱かれただけだった。自分はこれから寝台に押し倒されるだろう。そして、処女を破られるだろう。

でも、かまわない。

この人に抱かれてもいい。

この人はわたしの夫。

わたしを守ってくれる人。

わたしに情愛を注いでくれる人。

そして、わたしは、この人の妻――。

その夜、ペルセポネーはハデスに抱かれ、処女を失った。寝台の上で、本当の意味で一つになった。ようやく真の意味で、ペルセポネーはハデスの妻、冥王の妃となったのだ。

4

ペルセポネーは長い回想から戻って、夫の背中を見つめていた。結婚して一年近くの間、夫とは身体を交えなかったのに、一度身体を重ねてからは、何度も夫に抱かれるようになった。

夫を嫌う気持ちはもうなかった。嫌悪する気持ちもなかった。むしろ、抱かれるたびに夫を好きになった。

夫に抱かれるのは気持ちよかった。自分も、夫を気持ちよくしたいと思うようになった。何度も夫に貫かれ、夫のものを啜え、イカせた。

夫のことが好きだった。夫は照れ屋で、ペルセポネーは夫の照れた顔が好きだった。夫がイク顔も好きだった。夫のことは、もう大好きになっていた。もっともっと夫の照れた顔を見たい。夫を気持ちよくしたい。

夫にはいろんなことをした。手でも夫を気持ちよくした。でも、胸で気持ちよくすることだけはできなかった。

自分には胸がない。夫は気にしていないようだったが、胸があったら……と何度も思った。そうしたら、夫を胸で気持ちよくしてあげられるのに。どうして自分には胸がないのだろうか。胸があれば、もっと夫を……。

巨乳は叶わぬ夢、見果てぬ夢として諦めてきた。だが、突然、希望が見えてきたのだ。ヘルメスが面白いものをメデューサに渡したのである。

巨乳の種。

吞むと巨乳になるという。その代わり、大切なものを失ってしまうそうだ。

メデューサは巨乳の種を吞んで、巨乳に変身した。今では髪の毛も戻って、ゴキゲンな毎日を送っている。メデューサは、胸が大きくなってからさらに明るくなった。恋愛のれの字も知らない生娘から、恋に目覚めた娘へと変わりつつあるように感じる。

自分が巨乳の種を呑んだら、どうなるだろうか？
巨乳になる？

たぶん。

もっと夫を楽しませられる？

うん、きつと。

パイズリでイカせられる？

うん。

夫は喜んでくれる？

きつと。

夫を喜ばせたい。

でも、何を失う？

あの人に助けてもらったこと？ 今までの思い出？

ハデスとの思い出は一つたりとも失いたくない。四カ月間枕を投げつづけたことも、

忘れたくはない。

いい思い出も悪い思い出も、うれしかったことも腹立たしかったことも、すべて含

めて夫との思い出だ。いい思い出だけが人を、神を、内側から作り上げるわけではない。いい思い出と悪い思い出の双方が、人を、神を、内側から作り上げるのだ。

巨乳と引き換えに自分は何を失うのだろうか。夫との思い出でなければ、試してみたい。

夫はユリナスと違ってオッパイ好きではない。巨乳でなければいやというわけでもない。以前、夫も赤面しながら言っていた。

《おまえが巨乳になったらどうなるのだろうと想像したのだ！》

《わしは胸はどうでもいいのだ！ 胸のないおまえも胸のあるおまえも、どっちも好きなのだ！》

自分が巨乳になったら、夫はどんな顔をするだろう？

自分は――。

自分は、巨乳になったらパイズリをしてあげたい。大きくなった乳房で、思い切り夫を気持ちよくしていじめてあげたい。いっぱいイク夫を、見てみたい。胸を押しつけられて勃起する夫を見てみたい。

その日はヘルメスが冥界の宮殿を訪れていた。相変わらず、へらへらと薄っぺらい笑いを浮かべている。この男は、楽しいことが一番なのだ。他人の迷惑など、知ったことではない。

「メデューサは相変わらず巨乳だよ。ポインポイン。時々マルスのところに出掛けて酌をしてる」

「マルスト？ 珍しいのね」

「うん、まあ」

とヘルメスが少し誤魔化す。きっと何かしたに違いない。

「でも、これで巨乳の種が長持ちすることは証明されたね」

ヘルメスは満足そうである。噂では、メデューサに手渡す以前にウェヌスにも話を持ちかけたそうだが、断られたそうだ。

「今も持ってるの？」

ペルセポネーがさりげなく尋ねてみると、

「持ってるよ。呑む？」

と笑顔を見せた。

ヘルメスは楽しいことが大好き。自分が巨乳になってどんなことが起きるのか、興味津々なのだ。

「でも、代償があるんでしょ？」

「もちろん」

「わたしの場合は何になるの？ 髪の毛？ あの人の思い出？」

「メデュースじゃあるまいし」

とヘルメスが笑う。

「ペルセポネーの場合は違うよ」

「じゃ、何？」

尋ねると、ヘルメスが顔を近づけた。

「あのね……」

と囁く。

ペルセポネーは驚いてヘルメスを見た。

「それ、本当？」

「だって、それ以外ないでしょ？」

「外れてたら？」

「メデューサの時は外さなかったよ。ぼくは、髪の毛が蛇になるって予言したからね。その通りになった」

「もし違うものが失われたら？」

「それはない」

とヘルメスは自信満々に答えた。

「もしかして、呑みたいの？」

「あとで考えるから一粒ちょうだい」

ヘルメスは悪戯っぽい目で見て、黒い粒を渡した。

「ぼくとしてはハデスに飲ませるのを推奨。ハデスが巨乳になったら、最高に面白い」
「叩いていい？」

ヘルメスは苦笑した。ハデスがのっしのっしと足音を鳴らして戻ってきた。

「何を話していたのだ？」

「巨乳はすばらしいなって話」

とヘルメスが匂わせる。

「くだらん」

とハデスが切り捨てた。自分への心遣いだろう。

その夜――。

ペルセポネーは寝室で黒い粒と向き合っていた。

本当にこれで巨乳になる？

大切な思い出を失ったりしない？

あの人との記憶を、すべて失ったりしない？

ヘルメスの言う通り、本当にあれになる？

吞もうとすると怖い。

でも、巨乳になった自分を見て驚く夫を見てみたい。巨乳になって、夫をパイズリで楽しませてみたい。

（どうする？）

ペルセポネーは自問した。
巨乳には一度なってみたい。巨乳になって夫を気持ちよくしてあげたい。
でも——大切な思い出を失うのはいやだ。

6

翌日、ペルセポネーは再び寝室で黒い粒と向き合っていた。今日は、天界まで出掛けていたのだ。アポロンに会うためである。

アポロンに事を話すと、危ないことはやめた方がいいと忠告された。それでも占ってほしいと言うと、アポロンは占ってくれた。

「どう？」

ペルセポネーが尋ねると、アポロンは顔を向けた。

結果は——。

あとは自分が決断するまでだ。

ヘルメスは、失うのはあれだと言った。アポロンは結果について告げてくれた。言

葉を受けとめて決断するのは自分である。

ペルセポネーは夫のことを思った。

もし、二人の予言が外れていて自分が夫のことを忘れてしまったら——？ 夫はどれだけ悲しむだろう。

でも、巨乳になりたい。巨乳になって、夫をいっぱい楽しませてあげたい。

(あなたはどっちがいい？)

答えは返ってこなかった。決断は、自分が決めるものだ。

ペルセポネーは息を吸い込んだ。

決めた。

もう呑む。

決めたら、早かった。ペルセポネーは一気に巨乳の種を呑んだ。

味はほとんどしなかった。無味無臭。

(どれくらいで効くのかしら？ 一晚？ 二晩？)

不意に、呻き声が洩れた。

身体が変だ。

胸の辺りが苦しい。

(もう……?)

さらに胸が苦しくなった。何か飛び出しそうな感じがする。

(あなた……待っていて……もう少しで……)

いきなり、ぼんと何かが溢れ出し、ペルセポネーは吹っ飛んだ。ペルセポネーは寝台に背中から着地した。

(何? 何? 何?)

起き上がった途端、違和感があった。

重い。

胸が重い。

視線を下げた。

そこには——巨大な乳房のバルコニーが突出していた。視界が豊満すぎる胸のふくらみにさえぎられている。下が見えない。

感懐が込み上げて、きゅゅゅっ! とペルセポネーは奇声を発した。

(あなた! わたし、巨乳になった! 胸、おっきくなったゅゅゅっ!)

また、きゃくくつと声を上げて、寝台の上で飛び跳ねた。
これでパイズリできる。

あの人を、胸でいっぱい気持ちよくできる……！

あなた、待ってて！

今すぐ気持ちよくしてあげるから……！

7

ペルセポネーは、夫の寝室に向かっているところだった。家臣たちが挨拶をしようとして目をまるくしている。部下の反応が楽しい。

ハデスの反応は？

わたし、大切なことを忘れていない？

ペルセポネーは、夫に誘拐された時のことから思いだしてみた。

大丈夫。

全部覚えている。

寢室の扉を開けた。夫はちょうど背中を向けて、寝台に上がろうとしているところだった。

「見て」

ペルセポネーは声を掛けた。ハデスが振り返り——目が点になった。完全に固まった。凍りついたまま、口をぽかんとして静止している。

「どうかして？」

と意地悪に微笑んでみた。

白いドレスの下には、いつもならべったんこの胸があるはずだった。だが、そこには——顔ほどもありそうな大きさの双つの胸の果実が並んでいたのだ。あまりにも大きすぎて、乳房が半分以上はみ出している。乳輪も少し顔を覗かせている。

「なあに？」

満面の笑顔で尋ねてみた。

「ペ、ペ、ペ、ペ、ペルセポネー……」

期待通り、ハデスはどもった。

「どうかなさった？」

さらにペルセポネーは近づいた。ハデスの視線は、自分の巨乳に釘付けになっている。

巨乳の種の効果は抜群だった。一瞬で、自分を貧乳から巨乳の妃に変えてしまった。皆が見とれるのは、最高の気分だった。胸の重さすら、心地よいくらいである。ペルセポネーはわざと立ち止まり、屈み込んだ。これなら、胸の谷間がよく見える。

ごくりとハデスが唾を呑む音が聞こえた。

「なあに？」

無邪気に尋ねてみせる。

「ペ、ペ、ペルセポネーよ……それは……」

「それって？」

あくまでもしらを切る。

「そ、その胸はどうした？」

「お嫌い？」

「い、いや……」

夫が思い切り狼狽している。狼狽しながらも、視線は自分のオッパイに釘付けであ

る。こんなにも夫が自分の身体を見るのは、久しぶりだ。

(こうしたら、どうなるかな……?)

ペルセポネーは、いきなりハデスに抱きついた。

「ぬああっ！」

ハデスが唸り声を上げた。この世で最も好きな人に、思い切り豊乳をこすりつける。乳房のふくらみがたわみ、さらにひしゃげてハデスの身体に粘着した。

いっぺんでハデスの股間がふくらんでいた。

(凄い……♪)

夫が自分の胸に反応している。自分の巨乳に反応している。

「どこかが元気になってますよ」

しれっと言ってみた。

「そ、その胸はどうしたのだ？」

「大きくなったんです」

「急に大きくなるわけがなからう。巨乳の種を呑んだのか？」

ペルセポネーは、ハデスの背中に腕を回して、さらに乳房を押しつけた。弾力たっ

ぷりの乳房がさらに弾けていく。

「ぬぁぁっ！」

また夫が叫んだ。夫の身体がゾクゾクとふるえている。自分のオッパイが気持ちよくてたまらないのだ。

「どうかなさった？」

感じているのがわかっているくせに、今度はオッパイをこすりつけてみた。右に左に、身体を揺さぶって弾力いっぱいのかくらのふくらみをこすりつけていく。尖った乳首もたっぷりとこすりつける。

「ぬぁぁぁぁっ、ぺ、ペルセポネーよ……！！」

「気持ちいい？」

尋ねると、ハデスはうなずいた。

尋ねなくても、股間の屹立具合でわかっていた。もう苦しそうなほど、夫のペニスはパンパンにふくらんでいる。

「どこが気持ちいい……？」

ハデスは赤面しながら答えた。

「おまえの……胸……」

「わたしの胸？ おっきな胸？」

ハデスはうなずいた。

「大きな胸はお好き？」

「おまえなら、小さな胸でも大きな胸でもかまわん」

とまたハデスは昔自分に告げたことをくり返した。

「大きな胸のわたしはお好き？」

ハデスがうなずいた。欲望で喉がカラカラで、言葉にできなかったらしい。

「パイズリ、してあげましょっか？」

囁くと、ハデスは大きくうなずいた。ペルセポネーはしゃがみこみ、夫のペニスを露わにした。凄い角度でペニスが反り返っている。最近の中では一番の勃起角度である。

(こんなに元気……♪)

うれしくなる。

ペルセポネーはドレスを脱いだ。夫の視線が胸に注がれているのがわかる。ほんの一瞬でも逃すまいと、夫が自分の巨乳を見つめているのだ。

ツンと張ったたわわな果実が双つ、ぷるんと溢れ出した。林檎の実よりも遙かに大きい。細い華奢な体幹に顔ほどの大きさの大人の果実が実って、突き出している。乳輪は盛り上がっていた。さらに乳首もツンと突き出している。

(気持ちよくなってね♪)

ペルセポネーは愛情を込めて、夫の一物を双球に挟み込んだ。

8

妻の巨乳がペニスに密着した途端、ハデスは吐息を吐いた。妻の優しさが乳房のやわらかさとなって自分に触れたような感じだった。

妻の貧乳に不満だったわけではない。ただ、巨乳の妻も見たいと思っていた。貧乳の妻もステキだが、巨乳の妻もきつとステキに違いない。

その願いが、突然叶えられたのだ。

きつと巨乳の種を呑んだのに違いない。あれには代償があったはずだが……。

(うっ)



思わず呻いてしまった。

乳房を揺さぶられただけで、もうイキそうになっていた。とろけそうな乳肌が量感たっぷりには密着して、ペニスをこすり立てる。

「あうっ……」

「気持ちいい……?」

「う、うむ……」

うなずいたそばから、またハデスは呻いた。

「あなた、もしかしてイキそうになってます……?」

妻が悪戯っぽい笑みを向ける。

「め、冥界の王がそのようなことはない」

「あら、ほんと?」

妻は身体を弾ませて、乳房を揺さぶってきた。爆乳がゆさゆさと弾みながら、やわらかい乳肌を、ポリウムたっぷり肉塊をペニスにこすりつける。柔肌でペニスを摩擦されると、途端にとろけそうな快感がほとばしってイキそうになる。

「あうっ……!」

また呻き声が洩れてしまった。

「やっぱり、イキそうになってます？」

と妻がまた意地悪に尋ねる。

「な、なっておらん」

「じゃあ、こうしても平気？」

と妻がさらに乳房を揺さぶってきた。右の乳房をずり上げると同時に左の乳房をずり下げる。そして右の乳房をずり下げると同時に、左の乳房をずり上げる。

揺さぶりパイズリである。玄人だけが知っている技だが、それをパイズリ初体験のペルセポネーがやってきたのだ。

容赦ない、心地よいパイズリ責めを食らって、ハデスは呻いた。思わず腰がクネクネと躍った。抑えようにも、気持ちよくて勝手に腰が躍ってしまう。

「あなた、腰躍ってますよ」

「お、躍っておらん」

「あら、そう？」

涼しげに言いながら、妻がパイズリスピードを上げた。揺さぶりパイズリでイキそ

うになつているところへ、さらに乳房が速度を上げてペニスをこすってきたのだ。やわらかい、弾力たっぷりの乳房が、何度も両側からペニスを摩擦した。優しい、すべすべの乳肌が、ペニスに吸着して肉棒を責め立てる。

「んあっ、ペルセポネー……！」

「あなた、イッチャうんですか……？」

はあはあと息をつきながら、さらに妻がパイズリススピードを上げる。冥界の王の―物を、豊かな乳房で責めまくる。

「ペルセポネー……出るっ……！」

「出して……♪ 大好きな人の精液を浴びたい……♪」

ペルセポネーの爆乳がさらに揺れまくった。左右互い違いにバストが上下動をくり返し、これでもかとはかりにペニスを挟撃する。弾力と摩擦のところが責めに、チンポの先端の感覚が消えた。我慢しようと思つたが、もう快感は限界を超えていた。

ハデスは低い呻き声と同時に、妻の谷間に噴射していた。豊かな乳房に挟まれ、しごかれながら、精液が美しい妻の喉に掛かっていく。

「あん……♪ あなたたつたら……♪ きゃん♪」

予想以上の射精に、妻がかわいい声を上げる。

「凄い……こんなにイクなんて……もっとしごいちゃう♪」

男はイケば、ペニスが敏感になる。そのイッたばかりのペニスを、さらに爆乳で摩擦された。逃れようと腰を振ったが、妻のパイズリは完璧にペニスを挟み込んで、執拗にこすり立てる。

(くああっ、だめだっ……!)

ハデスはたまらず二度目の射精を放った。精液が思い切り飛び散る。妻が首を曲げて、ペニスにしゃぶりついた。

「んああっ……!」

ずずずっ!

じゆるじゆるじゆる!

いやらしい音が響き渡り、精液が亀頭ごと妻の口腔に吸い込まれる。小さな舌が、目まぐるしく亀頭の上を這いずりまわる。その上、乳房の挟撃だった。亀頭を舐められるだけでもイキそうなのに、自分を二度の射精に導いたパイズリが、容赦なく、執拗にペニスを責めてくるのだ。

「くああっ、ペルセポネーッ！」

妻の名を呼んで、ハデスは射精した。妻の口腔に、思い切り精液を注ぎ込んでいく。妻が乳房を揺さぶりながら、精液を嚥下する。

「も、もう胸は……」

「もっと飲まへて♪ あなたのオヒンヒン、お口とオッパイでいじめたい♪」

吸引音に、乳房を揺さぶる音が重なった。舌が龟头を這い回り、口唇がチンポを吸引する。同時に、双つの豊満な快感果実がこれでもかとはばかりにペニスに密着し、ペニスをしごいていく。

我慢など不可能だった。ハデスは激しく腰をひくつかせて妻の口腔に精液を打ち放つた。妻が精液を呑みながら、また乳房でチンポをしごきまくる。ハデスはまた連続して精液を放った。

妻がパイズリに夢中になっている。パイズリで自分を責め立てることに夢中になっている。

気持ちよかった。

妻に貪られるのは気持ちよかった。パイズリで責められるのは気持ちよかった。あ

さらに気持ちよすぎて、ひっきりなしに腰がゾクゾクしてしまおう。

「ペルセポネーよ……もう出ぬ……」

「ま〜だ♪」

さらにペルセポネーが乳房を揺さぶる。揺さぶりながら、ずずずと淫らな音を立ててペニスを吸引する。

腰が勝手にひくついた。暴れ馬のように腰が暴れまくる。だが、妻はペニスを啜え込んでいる。乳房で挟み込んでいる。そして、パイズリフェラはとろけそうな拷問となつてつづいていく。

(またイク……!)

ハデスはまたしても、妻の口の中に精液を噴射した。射精している最中にまた絶頂に襲われて、ハデスは射精した。

いったい何度射精させられたのだろう。

五度？ 六度？ いや、十度かもしれない。

ようやく妻が顔を上げていた。

「くす。まだしてほしい？」

妻が微笑んでいる。

「パイズリせよ」

命令すると、また妻がペニスを啜えた。乳房がたっぷりとペニスに密着し、激しい摩擦の往復運動を始めた。

（腰が砕ける……！！）

ハデスはまた腰をひくつかせながら、妻の口に射精していった。

さんざん妻にパイズリで精液を搾られて、ハデスは寝台に横たわった。妻も裸の乳房をハデスの身体に押しつける。爆乳が気持ちいい。

「ずっとこうしてあげたかったの」

と妻が囁いた。

「巨乳の種を呑んだのではないのか？」

心配していたことをハデスが尋ねると、

「ええ」

と妻は笑顔で答えた。

「だが、あれには代償が——」

「知ってます」

「何を奪われたのだ？ 髪か？ いや、髪はあるな。わしとの記憶か？」

妻は首を横に振った。

「結婚の約束で、八カ月間は天界にいられるってことになってたでしょ？ あれがなくなっただけです」

と妻は答えた。

「だから、ずっといっしょ。今も、一年中あなたといっしょにいるけど、一応、種を呑む前にアポロンにも確かめたんですよ」

と妻が微笑んだ。

ああ。

妻はそんなことまでして、巨乳になってくれたのか。

「まだパイズリしてほしいって思ってます？」

妻の顔に悪戯っぽい笑みが走る。

こういう言い方をする時の妻は、パイズリをしたいと思っているのだ。

「してくれるのか？」

尋ねると、

「してあげます♪」

元気に身体を起こして、またたわわな豊球にペニスを挟み込んできた。しっとりした乳肌がペニスに吸着する。

あ。

また自分はイカされまくるに違いない。

ハデスは直感した。

ペルセポネーが乳房を揺さぶりはじめた。舌先を伸ばして、亀頭をぴちゃぴちゃと打ちながら、双球を弾ませる。早くもじいんと快感の粒がペニス全体に広がって、上昇を始めた。

「もうイキそうになってる♪」

ペルセポネーが微笑みながら、さらに亀頭を舌でぴちゃぴちゃと打った。打ちながら、凄い勢いでペニスを豊乳でしごきまくる。

（またイク……！）

ハデスは早くも腰をひくつかせながら、愛しい妻の口に、精液を打ち放っていった。

巨乳ファンタジー 3if-アルテ
ミスの矢・メデューサの願い-
WEB アンケート特典 短編小説

著者名 鏡裕之
原画 Q-Gaku
原作 Waffle
発行日 2018年6月22日

(c) 2018 Waffle All Rights Reserved.